E5 超高齢者（80歳以上）呼吸器外科手術症例の検討

北九州市立市民医療センター呼吸器外科
産業医科大学第2外科
多賀聰、井上隆、永島明、安元伸宏

【目的】80歳以上の高齢者の呼吸器外科手術症例について検討した。【対象】1992年から1994年までに当科で行われた18例（197例）を対象とした。
【結果】同年度で行われた全呼吸器外科手術数の4%に相当し、最高齢群は87歳、男性が14例、女性が5例であった。胸痛が12例あり、4例に気管切断（Rg3例、R1で機能を取り戻すもの1例）、3例にsleeve lobectomy（R1g3例、R2g1例）、5例に肺歯切除を施行した。その他、肺機能検査1例、肺腫瘍型気管拡張症及び再建1例、バクラ切除1例、そして気管1例に対し気管気管で再建し、気象形成を行った。平均手術時間は166分であった。何らかの基礎疾患を持つものが17例（9.8%）と大半を占め、6例（32%）に、治療を要する重型合併症の認められ、特に、重度合併症の認めなかった。Performance Statusは9例で悪化、4例で改善、10例は変動であった。【結論】主要なものの機能評価を慎重に行い、低侵襲の手術及び合併症に対する早期対応を心がけよう、80歳以上の高齢者に対しても積極的に外科治療を行うことが考えられた。

E6 80歳以上高齢者肺癌における胸腔鏡下縮小手術の意義

広島大学病院、原発癌外科
石田照佳、石井哲朗、佐々木孝治

【目的】高齢化社会の現在、高齢者肺癌の治療法の対策が必要である。今回、80歳以上の高齢者肺癌に対する検討を行った。
【対象】1988年より現在までに経験した80歳以上の原発性肺癌症例を対象とした。
【結果】症例は80〜85歳（平均82歳）、男性5例、女性1例であり、喫煙指数は0〜1100（平均544）、開胸手術の頻度は3例（2.5%）、肺機能は術後型換気障害2例、術前型換気障害1例、正常型3例であった。術後の合併症をおきた症例は1例のみで、症例は術前型換気障害と考え、術前型合併症はすべて1例であった。手術法は、開胸手術による肺切除が3例、肺部分切除が1例と胸腔鏡下の肺部分切除が2例であった。開胸手術と胸腔鏡下手術を比較すると、それぞれ、術前型は170分と50分、出血量は2350mlと850ml、胸腔ドレン留置時間は4日と1日、手術から退院までの期間は25日と7日であった。術前型手術では1例に術後無気肺、1例に術後肺炎を併発し、術後肺炎の症例は術後30日に死亡した。
【結論】肺癌手術の適応は、肺癌手術の適応は、術前型換気障害の有無を基準とするが、術後のquality of lifeに留意した外科治療により期待される。